

こころ医療福祉専門学校佐世保校

令和7年度第1回教育課程編成委員会議事録

1 日 時 令和7年7月27日（日）10:00～10:50

2 場 所 こころ医療福祉専門学校佐世保校 5階 503教室

3 委 員 出席：高橋 賢一郎（公益社団法人 長崎県柔道整復師会）

上田 陽介（純心整骨院）

中野 仁、久野 貴史、甲斐 明日美

（敬称略）

4 主な内容

（1）開会のことば（学科長 中野）

本会の開会目的及び配付資料の確認を行う。

（中野）規定により、議事録をウェブ上で公開する。議事録作成後、委員に回覧し、公開前の確認あるいは修正をお願いする。今回事前にお伝えした審議の事項についてその内容を改めて説明する。

（2）教育課程編成委員会

ア 柔道整復学の実技授業について

（中野）第33回柔道整復師国家試験では、一般科目の55問中20問ほどが臨床に関する問題が出題されている。その中で実際の症状の写真やレントゲンの画像問題が半数ほどであった。教科書に基づいて実技授業を展開しているが、各外傷の施術のロールプレイに使用する衛生材料が高価なため、費用を捻出が困難なため、各外傷への施術の練習が十分にできていないという現状がある。先生方が施術される中で軟部組織損傷が圧倒的に多いため、授業で展開が必要である反面、認定実技審査では骨折、脱臼の項目が課題となるため、抜くわけにはいかない。しっかりと繰り返し指導をするためには費用を捻出するのが難しい状況である。先生方には、実技授業の中で行うべき外傷、具体的に実技授業の展開について、ご意見をいただきたい。新カリキュラムとなる1・2年生は、旧カリキュラムよりも実技授業を長くとっているため、現場で遭遇する外傷を実技授業に盛り込んでいきたいと考えている。具体的な方法があればお聞きしたい。

（上田）まずは鑑別が重要である。発生機序、年齢層、スポーツ歴等を聞き、切れている場所、不全、断裂なのかの見極めを行う。また、冷罨・温罨の使い分けも重要である。体質的に電気治療や手技が可能か等、その人に合わせての施術治療が必要である。整骨院範囲内の怪我なのか、保険の適用になるかの説明も行う。必要であれば外科の受診を勧め、診断を現場だけで決めつけないようにしている。問診・診断の練習が重要であると考えている。

（高橋）鑑別、診断が重要であることに同意見である。五十肩でも軽いものから運動ができない場合もあるが、程度によりどのような固定方法、処置方法が必要なのか変わるためである。

（中野）学生に内容を理解させた上で、施術の方法・ノウハウを細かく指導した方がよいということでは。また冷罨法のことを話にあったが、アイスバッグ等を使用しているか。

（上田）アイスバッグやアイシングシートを冷蔵庫に常に置いており、使用している。学生にも実際に体験させたほうが良い。凍らせているものにはタオルを巻いて当てる、どの程度の時間で冷えるのか等、知っておくと良い。保冷剤等で直接当てて体験し、危険性を感じ取るのも良い。

（中野）たしかに凍傷となるため、使用する材料の危険性も自覚しておくべきである。それから、学校の授業で見せるのはオーソドックスな方法となるが、様々な方法をモデルケースとして見せる程度は必要であると考えている。また臨床現場での後療法、運動療法についてはどうか。

（上田）高齢な方の場合、ペットボトルに水をいれたものでの運動を勧めている。ゴムバンド等もあるので、カタログを見せて提案を行い、指導を行っている。

（高橋）ペットボトルが非常に良い。患者は早く良くなりたい気持ちから重たいものを使おうとするため、重たすぎて良くない場合もある。

（中野）授業でもそのような実践的なものを使用して、正しいやり方を指導する方法を学ばせたい。では、スポーツ関係の外傷についてはどうか。肘の損傷の野球肘などで来院される施術とすると、一般的に関節の固定となるが、現場ではどのように施術されているか。

（高橋）症状的にきつい場合は固定するが、テーピングで処置をすることが多い。今ではソフトシーネを使ったりするが、患者は手を固定すると嫌がる方が多く、特に女性は日常のことができずに外すため、テープを使うことが多い。

（中野）限られた回数にはなるが、2～3回程度は体験として取り組みたい。物理療法としては電気、超音波治療となるか。

（高橋）超音波を使用し、症状が軽くなればストレッチに移行する。

（中野）手首の固定等はどうか。

（上田）腫れ具合を見て冷やす。その後はテーピングを行ったり、動きが悪い場合は専用のサポーターを勧めたりする。仕事や年齢層によって手を使えないと困る場合は、取り外ししやすいようにサポーター、テーピングが良い人の場合は、自宅でもできるように指導をしている。サポーターについては、種類も多いため、様々なものを買ってみて試している。テーピングは、人や症

状に合う方法があるため、いろんなやり方を試し、枚数も必要最小限になるように学生にやらせてみるのが良い。

（中野）スポーツトレーナー志願者が多いため、突き指等、スポーツ外傷の実技を取り入れたいが、テーピング以外ではどのような固定の方法をしているか。

（高橋）指の固定は、プライントンを使用している場合が多い。しっかり固定したい場合はシーネを使用して固定、症状が軽くなってきた場合はプライトンを使用する。

（中野）実技試験で課題として入るため固定具と指の包帯も行うが、普段実技授業で扱うのは少ないため、授業に取り入れたい。臨床現場では軟部損傷の患者が多いため、ひとつひとつ拾って、多いと思われるような疾患を選んで授業でさせた方がよい。どうしても認定実技審査に偏るため、プラスアルファでスポーツに絡んだ外傷に触れていきたい。

（久野）3年生になると認定実技、軟部組織損傷の検査法に終始することが多いので、治療・施術に関しては手薄になっている。トレーナー志望も多いため、時間を割いて体験、実践するべきであると考え。授業時間は限られているため、包帯を巻くコンテスト等ができればイベントに盛り込み、技術向上を目指したい。

（中野）ご意見いただいた実技の内容に関して、目線を変えて取り組みたい。委員の先生方や卒業生とも関わる機会になり得るため、イベント等を開催するときにはご協力いただきたい。

（3）教育課程編成委員会の閉会

（中野）次回は11月を予定している。今回ご意見を議事録によって内容を確認し、報告をする。